

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て——朝鮮に於ける字音傳來の徑路

滿田新造

緒言

後世の朝鮮字音が日本漢音と步調を同くし、兩者の間に脈絡の貫通があることは、一般の認める所と考へる。しかし是は大體に就ての話であつて、此處に看過してならぬことは、朝鮮字音と日本字音との間に類似の點があることである。かうなつて來ると、後世の朝鮮字音は唐初の北方支那音を傳へたものであると言ふだけでは不十分なわけになる。そこで此論文に於て、朝鮮字音に南方の吳系統の音が混入するに至つた次第を明にし、序を以て上古からの朝鮮

字音傳來の徑路につき説述したいと思ふ。つまり半島に於ける字音の傳來は、時代を異にして數同に行はれ、其中或る時代に傳來したもののは、半島に亡びて幾分日本に傳來して保存され(上古音)、他の時代のもものは大體日本に傳來して吳音として保存され、半島には一部を留めるのみとなり、又其後には日本の漢音と同時代の字音が傳來して其が一般に行はれることになつたのである。

猶附説に於ては、記紀萬葉等の日本古書に多少保存されて居る支那上古音の性質を説明し、其が漢代の樂浪系統のものであることを述べる。

第一章 朝鮮字音と日本吳音との類似點

先づ兩者の類似點を擧げる。其中不規則な點に於て類似した所のあるのは殊に注意を引く。

(一) 日本漢音に於ては、候韻(「オウ」)と尤韻

〔イウ〕は異なつた語尾であつて、明に別韻であるが、朝鮮音及び日本吳音に於ては、二韻共同一の語尾であつて結局は同一韻であり、二韻の區別は單に直音拗音の相違に過ぎない。即侯韻は直音「ウ」(丁)、尤韻は其ヤ行拗音「ユ」(丁)である。(但し往々直音に變化したものもある。)下に韻鏡(第三十七轉)所載の文字に依つて其發音を例示する。(以下説明の便宜上處々韻鏡を引く)。

朝鮮音		吳音		漢音	
歐	侯韻	ウ	ウ	オウ	ウ
優	尤韻	ウ	ウ	イウ	ウ
口	侯	子	ク	コウ	ウ
久	尤	子	ク	キウ	ウ
奏	侯	平	ス	ソウ	ウ
就	尤	平	ジュ	シウ	ウ

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

頭	侯	平	ツ	トウ
紂	尤	平	ヂュ	チウ

樓	侯	平	ル	ロウ
留	尤	平	ル	リウ

(二) 次に欣韻(韻鏡第十九轉)を擧げる。日本漢音に於ては此韻は眞韻(第十七轉)と同じ發音「イン」であるが、朝鮮音及び日本吳音に於ては眞韻とは差つた音になつて居る。即朝鮮音に於てはㄹ(眞韻の特徴はㄹである)、日本吳音では「オン」である(朝鮮の一は日本の「オ」に相當する音である、其實例は下の眞韻侵韻等の例にも澤山ある)。實例は、

斤、謹、近	朝鮮音	吳音	漢音
勤	ㄱ	コン	キン
乞	ㄱ	ゴン	キン
	ㄱ	コツ	キツ

殷、隱 ㄱ オン イン
欣 ㅎ コン キン

(三) 次の類似點は、眞韻の一部に、日本吳音に於ては「オン」、朝鮮音に於ては之に相當するㄱの音が存在し、且つ其存在の狀態が略同じな事である、眞韻の文字(韻鏡第十七轉)は日本漢音では全部「イン」の音であるが、日本吳音ではア行カ行の音を語首としたものに、「オン」の語尾を有するものがある、(或は此ア行カ行に於ける事實を本として、眞韻全體の吳音を統一的に「オン」と推定する説も出るかも知れないが、私は賛成し兼ねる。何となれば他の行の音に於ける、例へば「ホン」「賓」「ボン」「貧」「トン」「珍」、「ドン」「陳」、「ソン」「眞」、「ジン」「神」、「ロソ」「鄰」、「ノソ」「人」の如き發音は、我々に少からず奇怪の感を與へる發音であり、慣用上に於て又文獻上に於て到底發見し得ないものであるからである。私は眞韻の吳音は、一部は漢音と同じ「イン」で

あり、一部は「オン」であつて統一を缺くものと考へる)、所で之に類似した不統一が朝鮮音にも存して居る、下に實例を舉げる。

(1) 日本漢音と同語尾のもの

朝鮮音		吳音		漢音	
眞	진	シン	シン	眞	ジン
陳	진	デン	チン	陳	チン
貧	빈	ピン	ヒン	貧	ヒン
賓	빈	ピン	ヒン	賓	ヒン
鄰	린	リン	リン	鄰	リン
人	인	ニン	ジン	人	ジン

(2) 日本漢音と語尾を異にするもの

(ア行カ行の或者)

朝鮮音	吳音	漢音
巾	진	コン
		キン

種、僅

ㄷ

ゴン

キン

銀、鉦、愁

ㄷ

ゴン

ギン

乙

ㄷ

オツ

イツ

(四) 次の類似點は、侵韻(韻鏡第三十八轉)に於て、眞韻と同様の不統一が更に著しく現はれて居ることである。侵韻の日本漢音は全部「イム」で統一して居るが、吳音ではアカハ三行の音に於て「オム」の語尾、朝鮮音では之に相當するㄷの語尾が存する。下に實例を示す(括弧内の文字は入聲)。

(1) 日本漢音と同語尾のもの

朝鮮音

吳音

漢音

心、深

심(심)

シム

シム(シフ)

尋、甚、(十)

심(심)

ジム(ジフ)

シム(シフ)

樞、(繫)

심(심)

チム(チフ)

チム(チフ)

沈、朕、(塾)

심(심)

ヂム(ヂフ)

チム(チフ)

任、在、(入)

임(임)

ユム(ニフ)

ジム(ジフ)

林、臨、(立)

림(림)

リム(リフ)

リム(リフ)

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

(2) 日本漢音と語尾を異にするもの

朝鮮音

吳音

漢音

音、飲、蔭、(邑)

음(음)

オム(オフ)

イム(イフ)

金、錦、禁、今、(急)

음(음)

コム(コフ)

キム(キフ)

琴、(及)

음(음)

ゴム(ゴフ)

ギム

吟、

음

ゴム

ギム

品、稟

음

ホム

ヒム

此外朝鮮音では、極少數ではあるが、他行の音にもㄷ(ㄷ)の語尾が混じて居る。弄(尼立切)はㄷ、緝は音、濕習はㄷ、麌は音などである。

(五)

次の類似點は、職韻の文字の中に破格の音が存在し、其存在の狀態が日本吳音と朝鮮音と略同じな事である。日本漢音に依れば、德韻(「オク」と職韻(「ヨク」とは(共に韻鏡四十二轉)同一韻の直音拗音の關係であつて、此關係は一絲紊れざる普遍のものである。然るに吳音に依れば、職韻の文字の中カ行の音に屬するもの、外は、破格の「イキ」の語

尾を有して居る。朝鮮音も同様之に相當するㄱ(キ)の語尾を有して居る、其實例は、先づ漢音と同語尾を有するものは

極 殘

ㄱ

朝鮮音 吳音 漢音
コク キヨク
ゴク

の如きもので、正則の發音を有する文字は却て少數である(猶日本吳音及び朝鮮音に於ては、カ行に屬するヤ行拗音は直音化するのを原則とする)。次に「イキ」の變則音を有する例は、

域	職	食	識	寔
ㅈ	ㅈ	ㅈ	ㅈ	ㅈ
キキ	シキ	ジキ	シキ	ジキ
漢音	朝鮮音	吳音	朝鮮音	吳音
キヨク	シヨク	シヨク	シヨク	シヨク

直 ㄱ 데키 チヨク
逼 ㅈ 히キ ヒヨク
力 ㅊ 리キ リヨク
などである。此中域力のㅈの語尾は、昔韻の正則の發音で、是は支那原音から來たるものであるから、ㄱと同一に見て表の中に加へたのである。

(六) 次には豪韻(漢音「アウ」、宵韻(漢音「エウ」、蕭韻(同上)の日本古吳音が朝鮮音に一致することである。即前者「オ」「ヨ」後者「(○)ㄱ」である(古吳音といふのは記紀萬葉等の假字の音で、後世の佛典の吳音とは差つたものである、佛典では漢音と同じ「アウ」「エウ」の音を用いて居る)。古書の實例は、

(1) 豪韻(朝鮮音「アウ」)

高(エ) (神代記)高志國。越國(應神紀)高目(和

名抄河内郷名)紺口

十四) 禰河泊乃 (和名抄、上野郡名、利根

(止韻)

寶(五)

(萬葉四) 二寶鳥乃 鴉鳥の(萬葉五) 爾保鳥

能(萬葉十九) 保寶我之波(字鏡) 厚朴保保

加之波

抱(五)

(萬葉十四) 可美都氣努、伊可抱乃禰

呂爾 上野、伊香保の根ろに(同) 曾能可抱

與吉爾其類好きに

保(五)

(萬葉二十) 多可知保乃多氣爾萬千穗の

嶽に(萬葉十五) 保登等枝須子規

褒(五)

(景行紀) 能褒野(景行記) 能類野(應神

紀) 之褒珥椰枳鹽に燒き

毛(五)

(神代記) 夜久毛多都、伊豆毛夜幣賀

岐彌雲立、出雲彌重垣(雄略紀) 毛毛志

紀能、淤富美夜比登波百敷之、大宮人者

(2) 宵韻(朝鮮止)

遙(五)

(雄略紀) 阿遙比那陀須暮 足結なたすも

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

右の例に於ける阿遙比は、皇極紀の阿庸比拖豆矩

梨の阿庸比と同じく「アヨヒ」と讀むべきものであ

る。「ユリ」(從)と「ヨリ」、「ナユ竹」(弱竹)を「ナヨ

竹」、「マスカガミ」(眞澄鐘)と「マソカカミ」、「マユ

(肩)と「マヨ」、「スズロ」(漫)と「ソゾロ」などの對比

を考へて見れば、足結「アユヒ」を「アヨヒ」とも讀む

べきこと、極めて當然といはなければならぬ。

(3) 蕭韻(朝鮮音止)

蕭韻の文字の用例は見當らぬ。しかし此韻は、日

本の漢吳音や朝鮮音を見ても分る通り、全然宵韻と

發音を同くする韻であるから、類推法に依つて古吳

音は宵韻と同じ「ヨ」と定めて差支ないと思ふ。最後

に肴韻(朝鮮音止)も類似的の韻であるから、多分是も

「ヨ」の音であつたらうと思ふが、是は用例が全然見

當らないのみならず、蕭韻と同様な類推法は一寸出

來難いので、想像に止めて置く。

猶前述の「オ」「ヨ」の音は、「アウ」(豪韻)「エウ」

(蕭韻宵韻)の音が約まつたもので、本音ではあるまいとの説があるが、是は賛成出来ない。日本の古書の假字の音は、字音の初の綴りを其儘用ゐることを規則として居る。例へば養(「ヤウ」)を「ヤ」に、良(「ラウ」)を「ラ」に、計「ケイ」を「ケ」に柴「サイ」を「サ」に、追「ツイ」を「ツ」に、類「ルイ」を「ル」に用ゐるやうなものである(水「スイ」を「シ」に用ゐたやうな例は甚稀である)。であるから「アウ」「エウ」を假字に用ゐる場合には、「ア」「エ」の音として用ゐるのである。實例を舉げて見れば、草「サウ」の字は「サ」に用いてある。即萬葉十四に草乎思香奈久毛、同二十に布須也久草無良とあるのが其である、又要(「エウ」)の字を「エ」に用ゐた例は萬葉に澤山の例があつて、多要(絶エ)、故要(越エ)、美要(見エ)、毛要(燃エ)、奈要(姜エ)、伎已要(聞エ)、比要(稗)、要太(枝)などである。

以上は皆漢音を用ゐたものである、(古書には吳音の

外漢音も可なり用ゐてある)。右の次第であるから「オ」「ヨ」は吳音の本音なること明である。

第二章 朝鮮に於ける漢字

輸入の始

朝鮮字音に日本吳音と類似の音が存することは、百濟と南方支那の交通の結果であるから、此交通の事に就て説述すれば、其れでよいやうに思はれるが、やはり古代からの字音傳來に就き、順を追うて説述する方が大に了解を助けると考へるに依て、此章から始めることにした。

朝鮮字音の起源を箕子の入國や秦人の入韓に求める説もあるが、専門家の朝鮮古史研究の結果に依つて考へる時は是は無理なやうである。下に専門家の研究に本づいて卑見を述べやうと思ふ。先づ箕子が朝鮮に封ぜられた事であるが、是は甚疑はしい。第一彼及び彼の子孫の事は古い史記や漢書の朝鮮傳に

は一切記してなく、後に出来た魏略や魏志に始めて記してある。それも四十代續いたと言ひながら、最後の王否王準の事が極めて簡単に記してあるだけで、歴史事實としては甚不確實と言はざるを得ない。第二に假令箕子が朝鮮に封ぜられた事が事實としても、王險即平壤に都したといふことは、古書には何等根據が無く、全く近代になつて言ひ出した事である。幣原博士は其著朝鮮史話に於て、「平壤は遼陽の舊號であり、時の移ると共に、箕子の子孫が次第に東へ東へと押しのけられ、箕準の時には今の平壤に来て居たのかと思はれる、白鳥博士のやうに、箕子來壤説を先祖をえらく見せる爲に、後人が作つたものであらうと言はれるのも一理あることである」との意味を述べられて居る。

右の如く箕子が朝鮮に封ぜられた事が事實であるとしても、半島に入國した事は殆ど信ぜられぬ事であるから、之を以て朝鮮に於ける支那文化の起源と

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

することは無理な話と考へる。

次には秦人入韓の事であるが、此事は三國志に出て居る。即

辰韓在馬韓之東、其耆老傳世自言、古之亡人避秦役、來適韓國、馬韓割其東界地與之、有城柵、其言語不與馬韓同、名國爲邦、弓爲弧、賊爲寇、行酒爲行觴、相呼皆爲徒、有似秦人、非但燕齊之名物也、名樂浪人爲阿殘、東方人名我爲阿、謂樂浪人、本其殘餘人、今有名之爲秦韓者。

といふのであるが、第一に注意すべき事は、其耆老傳世自言と前置してあつて、普通の史的斷言でないことである。次に有似秦人、非但燕齊之名物也とあるのから考へると、秦人は秦時代の人ではなくて、秦地方の人の意味である。所で如何に秦の始皇の壓制が烈しいからとて、今の陝西地方からはるばる朝鮮の南部まで逃げて來るとは、容易に想像し得ないことである。其よりは三國遺事の

崔致遠云、辰韓本燕人避之者、故取涿水之名、
稱所居之邑里、云沙涿漸涿

と言ふ方が事實としてどの位可能性が多いか分らぬ。最後に謂樂浪人、本其殘餘人とあるのが本音を吐いたものであらう。即此移住民は支那民族にしても、秦時代のもので又秦地方のものでなく、樂浪郡などの出來た漢代以後のものであらう。白鳥博士が秦辰同音から考へ出した説と言はれたのは（滿洲歴史地理卷一、漢代の朝鮮）正しい考察と思ふ。要するに支那文化の朝鮮傳來を秦代又は其以前に置くことは無理と考へる。

次には衛滿の朝鮮侵入であるが、彼が半島の北部に入り來つて王險即平壤に都した事は、史記朝鮮傳に明記する所で、事實としては確實と言へやうが、學問を輸入し保存したものと考へることは困難と思ふ。彼が朝鮮に侵入した有様を史記には

滿亡命、聚黨千餘人、魑結蠻夷服而東走

と記し、魏志濊傳には

陳勝等起、天下叛秦、燕齊民避地朝鮮、數萬口、
燕人衛滿魑結夷服復來王之

と記して居るのを見れば、如何にも野蠻人の首であるやうに思はれるし、其後彼の孫右渠が漢の武帝に滅されるまで百年足らずの歴史は、全く侵略と戰爭の歴史に外ならぬことを考へれば、假令知らず／＼文字や學問を輸入した事があつても、其は其時限りのものであつて、後世の學問の起源と見ることは穩當でないと思ふ。

漢武帝が衛氏の朝鮮を滅し、樂浪等の郡縣置いた結果、支那文化隨て漢字も、次々に續いて輸入されたことは確然動かすべからざる事實である。即近年になつて、平壤附近の樂浪郡治の舊蹟から種々の遺物が發掘され、其中に文字を刻したものが色々難つて居る。二三の例を挙げれば、前漢昭帝始元二年の銘ある漆器、元帝永光三年の銘ある銅鍾、銅鍾と

一諸に掘出された好上有山人不知の七字の銘ある古鏡などが最も古いものである。昭帝の始元二年といへば、朝鮮に郡縣の置かれた武帝の元封三年から僅に二十三年の後である。其外新莽時代や後漢時代のものも色々發掘されて居る。私は朝鮮に於ける漢字隨て字音の輸入に關する正確な歴史 (authentic history) は前漢の武帝時代に始まり、其輸入の徑路は北方支那からであることを主張するものである。

其後朝鮮の郡縣も衰へ、其疆域も狹められたが、後漢の末に至つて、樂浪の南部屯有縣 (黃海黃道州邊ならんといふ) 以南の地を回復して帶方郡を置いた、其結果又々此地方に支那の文化が輸入されて、其遺物が近年發掘されて居る、即ち明治四十四年には黃海道鳳山郡から、使君帶方太守張撫夷傳、太歲在戊漁陽張撫夷傳、張使君傳、太康元年三月八日王氏造等の銘ある傳が出て居る、(太康は西晉武帝の年號である)、終に西晉の末に至つて

樂浪帶方は亡びて、朝鮮に於ける支那の郡縣は終を告げた。

樂浪の漢字使用は早くから百濟新羅等の半島南部に波及して居る。樂浪と半島南部との交通が古く起つて居るべきことは殆自明の理であるが、念の爲史上の記載を擧げて見るに、魏志には魏略を引いて、王莽の時辰韓の人廉斯鎬といふものが、樂浪の土地の美を聞いて移住した事を述べ、後漢書には光武帝の建武二十年に、韓人蘇馬諶が樂浪に至つて貢獻した事を記し、三國史記では新羅百濟兩本紀共、始祖の時代から樂浪に關する記事が散見して居る。漢字の半島南部に早く輸入されたことは當然といふべきである。されば後漢の時代には百濟新羅に文字の使用が可なり行はれた明證がある。三國史記百濟己婁王本紀四十九年(後漢安帝永光四年)の條には

新羅爲韃靼所侵掠、移書請兵、王遣五將軍救之同蓋婁王二十八年(後漢桓帝永壽元年)の條には

新羅阿飡吉宜謀叛事露來奔、羅王移書請之、不送、羅王怒出師來伐

の記事があり、新羅本紀にも同一事件を記して、二度共やはり移書の字が用ゐてある。(新羅百濟の初世の紀年は精確ではないと言ふ説もあるので、支那の年代に直して確實に永光元年永壽元年に當るかは疑問であるが、何れにしても古いことは争はれぬ。)それから新羅沾解王本紀五年(支那は三國時代)の

漢祗部人夫道者、家貧無諂、工書算、著名於時、上徵之爲阿飡、委以物藏庫事務

の記事も一の證據を増すものである。

そこで是从から百年餘り後の、百濟近肖古王三十年の

古記云、百濟開國已來未有以文字記事、至是得博士高興、始有書記

といふ三國史記の文は、例へば歴史などの纏まつた記録を指したものと考ふべきである。吉田博士の日

韓古史斷には、「盖官府記室の設を謂ふ乎」と言つてあるが、或はさうかも知れない。要するに普通の簡單な記事には博士といふやうな大學者を要せぬ事と思ふ。

第三章 高句麗の字音は北方

系統なり

次は高句麗であるが、此國は鴨綠江流域に根據を置き、遼東方面に於て可なり古くから支那と接觸した。魏書に依れば王莽の時既に支那との交渉が始つて居り、其後、後漢から隋に至る北方の諸王朝と交通した記事が三國史記に見えて居る。又南方支那との交通は三國時代に始り、東晉以後の南朝にも交通した事、是亦三國史記に見えて居る。かく高句麗は南北兩方面から支那に交通して居るけれども、地理上の關係から考へて、北方支那との交通が遙に頻繁であり、其方からの影響が多であつた事は想像す

るに難くない。さて北方支那との交通は早く漢魏時代に始つて居るけれども、其時代に既に學問文字が輸入され其が普及したとは考へられぬ。何となれば高句麗と北方支那との交通は其初主として戦争であつたからである。高句麗は既に後漢代から支那の領土侵略に餘念なく、殆ど戦争の絶間ないやうな有様であつて、支那から擊破された事少からず、殊に後漢の公孫康、魏の毋丘儉、燕の慕容皝に破られた時は、其たび毎に都城廢墟となり國殆ど滅亡に類したのである。わづか百五十年許の間に、かやうな災厄に三度も見舞はれては、とても學問保存どころの騒ではあるまいと思ふ。であるから高句麗に學問が輸入され其が保存され普及するに至つたのは、とても支那には叶はぬと斷念して、支那に服従し平和の交際を始めた後でなければならぬ。即故國原王が燕に屈服して屬國の禮を執るに至つた後でなければならぬ。しかし燕は間もなく滅亡し、苻秦が北方支那を

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

統一して、こゝに始めて學問及び佛教輸入の事が起つたのである。それで三國史記小獸林王の條に

二年夏六月、秦王苻堅遣使及浮屠順道、送佛像經文、王遣使回謝、以貢方物、立大學教育子弟

三年始頒律令

四年僧阿道來

五年春二月、始創肖門寺、以置順道、又創伊佛蘭寺、以置阿道、此海東佛法之始

とあるのが其である。即佛教學術皆北方支那から輸入されたものである。猶高句麗に於ける佛教學問の傳來に關する記事は、唯是だけであつて誠に少いが、南方支那から傳來の記事の更に無いことは大なる注意に値する、要するに高句麗に於ける漢字字音は北方系統に屬するもので、其時代は東晉の世の中頃からであると考へる。

三國史記の高句麗嬰陽王十一年の條に、國初始用文字時、有人記事一百卷、名曰留記の文がある。

國初を高句麗開國の初と解する人もあるやうであるが、是は初の字に拘つた考である。はるか後世に出來た三國史記さへ五十卷に過ぎないのに、高句麗開國の初に一百卷の歴史があつたとは考へられぬ、國初は唯昔と言ふ意味に解すべきもので、小獸林王の時代か又は其少し後を指したものと見るべきである。

第四章 百濟の字音は南方

系統なり

百濟に於ける學術傳來に關しては、史籍に其明文が殆無く、他の事實から推斷する外はない。古くは北方の樂浪方面から、百濟に漢字の傳來したものであることは、第二章の終に述べた所である。下つて西晉の頃に至り、百濟は北の方支那の郡縣たる帶方を侵略し之を占領したから、更に此方面から支那文化の影響を被つた事は争はれぬ事實である。是は日

本の古史に記す所の阿知使主の歸化を見ても直に了解される。其記す所に依れば、阿知使主は後漢の靈帝の子孫であつて、始め帶方に居り、後百濟高句麗の間に移り、終に十七縣の民を率ゐて日本に歸化したといふのである。かやうの次第であるから、百濟には其始め北方系統の字音が傳來した事は否まれぬ事實である。しかし其後になつて、南方支那から大なる影響を受けたことは、是亦否まれぬ事實である。百濟から傳つた日本字音を吳音と呼ぶことが何よりの證據である。百濟が百年間に亘つて、専ら南方支那と頻繁な亦通を行つたことは實に此結果を來したものである。左に此交通につき説述する。

百濟と支那との交通の始めて三國史記に見えて居るのは、近肖古王二十七年（東晉簡文帝咸安二年）の春正月遣使入晉朝貢の文である。其後晉宋等の南方王朝との交通記事が頻繁に出て居る。つまり近肖古王以後百年間の百濟支那の交通は殆ど全く南方支那

に限られて居る。是は北方の強敵高句麗が北方支那に親交を結び、南に向つて百濟を壓迫した結果であつて、百濟は自衛上一方は支那南朝に朝貢し、一方日本に親んで其保護を仰いだのである。

百濟は蓋鹵王の時に至つて始めて北方支那に交通した（近肖古王の始めて南方支那に通じた時より百年後）、其時百濟は使を北朝の魏にやつて、高句麗が攻めて來て困るから、どうか我國を助けて高句麗を征伐して呉れと哀願した。魏は、高句麗は古くからの屬國であるのに（高句麗稱藩先朝、供職日久）、汝は今始めて交通したばかりである（卿使命始通）と言つて取り合はなかつた（三國史記、北史同じ）。猶三國史記には

王以麗人屢犯邊、上表乞師於魏、不從、王怨遂絕貢。

とあるから、百濟は唯魏の援助のほしさに一寸交通を始めて見たが、一度だけで止めてしまつたのである。

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

る。其後南北統一迄に、北朝との交通記事が二三回三國史記に見えて居るが、到底南朝の東晉宋齊梁陳との交通の頻繁なるに比較出來ぬ。

前述の次第であるから、百濟へ後世の支那文化隨て學問が南方支那から傳來したのは自然の勢といふべきである。乏しい記事ではあるが、左の三ヶ條の明文は南方傳來の證とするに足る、一は增補文獻備考に南史を引て

百濟毗有王二十四年、南史云、百濟遣使朝宋、求易林式占、文帝詔與之

とあり、一は三國史記聖王本紀に

十九年王遣使入梁朝貢、兼表請毛詩博士^{〇〇〇〇}、^{〇〇〇〇}經義^{〇〇〇〇}

とあり、一は三國史記枕流王元年に

秋七月遣使入晉朝貢、九月胡僧摩羅難陀自晉至、王迎之致宮內禮敬之、佛法始於此

とあるのが其である、晉は言ふまでもなく南方の東

晉であり、又佛教と文字との間には密接の關係あることも勿論である、要するに東晉時代の末から南北朝時代にかけて、漢字漢文が南方支那即吳の地方から百濟に輸入され、其が又日本に傳はつて日本吳音として後世に保存されたが、半島に於ては大部分消滅し、第一章に掲げた諸點のみが今日に傳はつたわけである。

第五章 新羅上世の字音の

輸入經路に就て

三國鼎立時代に於ける新羅の學術輸入に關しては、全然史籍の記載がない。しかし最初の傳來は北方經路のものと考へねばならぬ。何となれば南方支那との交通に先ち、新羅には既に漢字が可なり盛に用ひられて居つたからである、南方支那との交通の始は、増補文獻備考に

法興王二年梁武帝普
通二年時麗濟二國皆通聘上國、新羅

地偏東隅、無以自達、至是隨百濟使貢方物于梁とあるのが其である。三國史記に依るに、其前年即法興王の八年には律令頒布の事があり、其より七年前の智證王十五年には謚法制定の事があり、更に以前の同王四年には下の如き記事がある。

冬十月群臣上言、始祖創業以來、國名未定、或稱斯羅、或稱斯盧、或言新羅、臣等以爲新者德業日新、羅者網羅四方之義、則其爲國號宜矣、又觀自古有國家者、皆稱帝稱王、自我始祖立國、至今二十二世、但稱方言、未定尊號、今群臣一意、謹上尊號新羅國王、王從之

此文を觀れば、當時漢學も相應に研究され、漢字も使用された事明白である。そこでは等の漢字漢文は是非北方から傳はつたものと見なければならぬ。しかし北方支那から直接に傳はつたものと考へる事は出來ぬ。何となれば、新羅の北方支那との交通の史籍に見えるのは、奈勿王二十六年に一回苻秦に朝貢

したことで、其後約二百年間は交通の記事が全く見えず、前記の智證王法興王より後の眞興王の二十五年に至つて、始めて北齊に朝貢し其封冊を受けた記事が見えるからである。かゝる次第であるから、是は間接に傳來したものと考へるより外はない。さて間接の傳來に就ては凡そ三つの場合が考へられる、一は第二章の終に述べた樂浪方面からの傳來である。しかし是は可なりに古い事であるから、完全に保全されて後世に普及したかは疑問である、(幾分の保存は有つたらうが)、私は今少し近い時代の傳來に重きを置きたいと思ふ、次に新羅の佛教は其始め訥祇王の時に、高句麗の沙門黑胡子が傳へたことは、三國史記法興王十五年の條に記す所であるから、之に伴つて漢字漢文も高句麗から傳はつたかとも思はれるが、擧行佛法と言ふ如く愈佛教が公に認められたのは、前記法興王の十五年であるから、其以前の佛法は微々たるものであり、隨て之に伴ふ漢字の

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

輸入も亦大したものではなからうかと思はれる。猶法興王の時は既に漢字漢文の可なりに盛になつた後である。さすれば第三の帶方からの傳來を認める外はない。是は小田文學士(省吾)の説であつて、智證王の即位に先つこと二十五年、百濟の蓋鹵王の戰敗の結果、帶方の舊地が高句麗に歸し、此地方の人民の流移により、帶方の文化が新羅に輸入された結果、智證王法興王の時代に漢學の隆盛を來したものと推斷するといふのである(朝鮮史講座)。至極尤な推斷と考へる。是が新羅上代の字音の主として基く所であると思ふ。

前述の如く新羅上代の字音は其始め北方から傳來したものであるが、茲に看過すべからざる事實がある。眞興王の十年以後、連年使を梁陳等の南方王朝に遣つて方物を貢し、又同年以後佛教が頻りに南方支那から傳來し、佛寺建立教法隆昌を來した事である、其傳來の記事を下に引用する。

眞興王十年、梁遣使與入學僧覺德送佛舍利、王使百官奉迎與輪寺前路(三國史記)

同二十六年、陳遣使劉思與僧明觀來聘、送釋氏經論千七百餘卷(三國史記)

眞平王七年遣僧智明入陳求法、十八年而還、時奉佛愈甚、名僧高釋求法中國者、前後相望、十一年遣僧圓光入陳求法、後十二年而還

の如きものである。此等の事實に依て推測するに、新羅の字音、少くとも佛典を讀む字音などは、後になつて南方字音の影響を受けたものでなからうか。

第六章 現行朝鮮字音の起源

前諸章に論じた如く、三國鼎立時代に傳來した字音は、時代に於て古いことは勿論、場處によつて南方系統のものがあり、又北方系統のものがあつてまち／＼である。此狀態が其儘續いたならば、今日でも朝鮮字音は處によつて其發音を異にすべき筈であ

る。しかるに現行の朝鮮字音は、時代に於いて新しいものであり、又全半島を通じて統一されたものである。是は全く半島の政治的統一、即新羅の全半島占領の結果に外ならぬ。

今新羅の半島統一の時代を考へるに、文武王の時(唐高宗の時)には百濟高句麗相次いで滅亡し、唐は其地を占領し都督府を置いて之を治め、新羅は半島の東南部に國を立つるに過ぎなかつた。然るに高句麗の滅亡後間もなく、新羅は百濟の舊領地の蠶食を始め、早く既に文武王の時に於て多大の土地を占領するに至つた、さて唐との戰爭は文武王十六年(唐高宗儀鳳元年)までしか、三國史記に記してないから、恐らく唐は此年以後事實上半島を放棄して新羅の自由に任せたのであらう。其後六十年、聖德王三十四年に至り、唐の玄宗は勅して涇江(大同江)以南の地を新羅に賜ふた事が三國史記に見えて居る、即玄宗は新羅の半島領有を公然認めたものである。

此半島統一時代即初唐時代に於ては、日本の遣唐使派遣と同じやうに、新羅に於ても支那の制度文物の輸入が盛に行はれた。新羅と唐との交通は眞平王四十三年（唐高祖武德四年）に始まり、是からは連年、遣使大唐朝貢の記事が三國史記に見えて居る。其交通の頻繁なことは到底東晉時代南北朝時代などの比ではない。今學術輸入獎勵に關する記事を、三國史記から引用列擧する、先づ善德王九年（唐太宗貞觀十四年）には

王遣弟子於唐請入國學、是時太宗大徵天下名儒爲學官、數幸國子監、使之講論、學生能明一大經已上、皆得補官、增築學舍千二百間、增學生滿三千二百六十員、於是學者雲集京師

眞德二年（貞觀二十二年）には、王族金春秋が唐に使し、太宗に謁して優遇を受けた事を記し、其中に春秋請詣國學觀釋奠及講論、太宗許之、仍賜御製溫湯及晉祠碑並新撰晉書

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

神文王二年（唐高宗晚年）には
六月立國學置卿一人

同六年（唐中宗嗣聖三年）には

遣使入唐、奏請札記并文章、則天令所司寫吉凶要札、並於文館詞林採其詞涉規誡者、輒成五十卷賜之

聖德王十六年（唐玄宗開元五年）には

春二月置醫博士算博士各一員、秋九月入唐大監守忠廻、獻文宣王十哲七十二弟子圖、即置於大學

同二十七年（開元十六年）には

秋七月、遣王弟金嗣宗入唐獻方物、兼表請入國學、詔許之

孝成王二年（開元二十六年）には

夏四月、唐使臣邢璣以老子道德經等文書獻于王
景德王二年（唐玄宗天寶二年）には

唐玄宗遣贊善大夫魏曜（中略）并賜御註孝經一部

同六年(天寶六年)には

春正月、置國學諸業博士助教

同八年(天寶八年)には

三月置天文博士一員、漏刻博士六員

同十七年(唐肅宗乾元元年)には

夏四月置律令博士二員

等の記事がある。かくて新羅の漢學は鬱然として勃興し、既に初唐代に於て、文章則強首と言はれた有名な強首(三國史記卷四十六、列傳六)、讀儒家之書、兼涉老莊浮屠之說といはれた金仁問(同卷四十四、列傳四)、以方言讀九經訓導後生、至今學者宗之と言はれた薛聰(同卷四十六、列傳六)等の幾多の大家が輩出するに至つた。

此盛なる唐學の輸入と共に、新しい初唐代の字音が輸入されたのは必然の勢である。其結果日本に於けると同様の計畫が、字音の上に企てられた事は推測に餘ある。即從來行はれて居つた舊い字音を廢止

し、新しい初唐代の字音を以て之に代へる計畫である。而して新羅では日本以上の好成績を收めた。日本では從來行はれて居つた吳音を廢止することに成功せず、唯新しい漢音を普及し得たに止まつて、後世永く漢吳二音の對立を見るに至つたが、新羅では字音統一に成功し、舊來の字音を全然絶滅させることは出來ず、多少の古音を保存する結果とはなつたが、新字音の中に舊字音を融合せしめ、統一的の朝鮮字音を形成することが出來た。是即朝鮮字音の中に百濟傳來の日本吳音と類似のものが存在する理由である。

附 說

日本の古書に見ゆる上古音に就て

此處に日本の古書の假字に保存されて居る上古音の如何なるのかを説述し、其が朝鮮經由のもので

あることに説き及ぼしたいと思ふ。記紀萬葉等の古

書に古代の音が残存して居ることは、既に黒川春村の音韻考證に指摘した所である。同書では此外の種々の不規則な異音をも漫然古音と名づけて列擧して居るが、是は賛成し難い。春村は古書(日本の)に見える音と、支那古代の音とを混同して、之を同一の古音の名稱の中に包括せしめたのである(大矢透氏の假名源流考は此書に本いたものと見え、同様のやり方である)。日本の古書には種々の轉訛音が用ひてあるから、之を悉く支那の古音を保存したものと考へることは出来ぬ。支那上古の詩賦の押韻法に照し合せて一致するものに限り、古伏音と見るべきものである。此點から考へて下の二つの發音などは疑なく上古音を傳へたものと思はれる。

(一)之韻(中古音「イ」)哈韻(中古音「アイ」)の文字が、「オ」韻の音に用いてあること。

(二)支韻(中古音「イ」)の文字のある者が、「ア」韻の

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

音に用いてあること。

(一) 古書に於ける實例

右の中前者の之韻哈韻の古音につき、詳説したいと思ふ。先づ日本古書の實例を擧げる。

意(「オ」)

(仁德記)和賀意富岐美能
我が大君の

(萬葉五)意母閉騰母とも

己(「コ」)

(萬葉九)船己具如久
船漕く (萬葉

十七)己呂母泥乎衣手

起(「コ」)

(播磨風土記)賀毛郡起勢里
巨勢部此村に居る

今は古瀬村と言ふ

杞(「コ」)

(和多抄)枸杞俗音久古

其(「ゴ」)

(萬葉十七)伊麻能其等今の (同上)

伎與吉瀬其登爾清き瀬毎に

期(「ゴ」)

(萬葉五)此月期呂毛此月頃も (同上)播

倍多留期等久延へたる如く

基(「ゴ」)

(神代記)淤能基呂島
(神代紀)磯敷盧島(自磯之島)

已〔ヨ〕

（雄略記）加多理^も登母^も語言^も

（法王帝説）等已刀彌々乃己等^{（用明紀）}

總耳^も（同上）等已彌居加斯支移比彌^{（紀）}

（推古記）豐御食炊屋比賣

里〔ロ〕

（法王帝説）葛木當麻倉首女比里古^{（用明紀）}

廣子^{（懷風藻）}藤原朝臣萬里^{（萬里一本）}

哈韻

台〔ト〕

（神代紀）中臣連遠祖與台產靈^{（藤原系圖）}

居々登魂

苔〔ト〕

（神武紀）介瀾羅毗苔茂苔^{（かみろ本）}（仁

德紀）夜葬苔烏輸疑^{（大和を過き）}

耐〔ド〕

（神代紀）陸爾幡譽戾耐母^{（邊には寄れども）}

（同上）播磨都智耐理譽^{（濱つ千鳥よ）}

乃〔ノ〕

（萬葉十九）安之比奇乃山乃^{（足引の山の）}

倍〔ホ〕

（神代紀）多磨廻彌素磨屢廻^{（玉の御統の）}

（神后紀）保枳茂苔倍之^{（壽き同ほし）}（同

上）珥倍^{（珥倍）}適利能^{（鳥の）}

（二）押韻上の證明

次に詩賦に於ける之韻哈韻の用法を調べて見るに、上古と中古では全然異なつて居る。上古といふのは先秦時代の詩經や楚辭などの用韻を指し、中古といふのは廣韻に定めた同用獨用を指すのである（同じ中古と言つても、晉代や南北朝時代の用韻法は廣韻に定めてあるものと多少異なつて居るが、之韻と哈韻を分用して居る點は同一である）。今此上古中古の相違を簡單に表で示せば左の通りである（段氏分部は清段玉裁の六書音均表の古韻分部である）。

段氏分部

上古の用法

韻目

日本漢音
即中古音

中古の用法

第十六部

別用

支

「イ」

第十五部

別用

脂

「イ」

同用

第一部 同用

〔之〕 〔イ〕
〔哈〕 〔アイ〕 別用灰韻と
同用

「イ」と「アイ」とは異なつた發音であるから、中古の用韻法に於て二者を分用したのは當然の事である。之に反し上古の用韻法に於て、之哈二韻同用であるのは、二韻の發音の同一なることを示すもので、日本の古書が示す所の事實と一致するものである。猶下に上古の用韻法を知るに足るべき適例を詩經から引用する。

〔君子于役一章〕 君子于役 不知其期 曷至哉
雞棲于埭 日之夕矣 羊牛下來 君子于役 如
之何勿思

〔南山有臺一章〕 南山有臺 北山有萊 樂只君子
邦家之基 樂只君子 萬年無期
〔節南山四章〕 弗問弗仕 勿罔天子 式夷式
已 無小人殆 瑣々姻亞 則無臚仕
〔十月之交五章〕 皇父卿士 番維司徒 家伯冢

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

宰[○] 仲允膳夫 聚子内史[○] 厥維趣馬 橘維師氏
(氏字合韻)

〔頍弁二章〕 有頍者弁 實維何期 爾酒既旨
爾殽既時 豈伊異人 兄弟具來

〔雨無正六章〕 維曰于仕 孔棘且殆 云不可使
得罪于天子 亦云可使 怨及朋友(友字古音此
部にあり)

〔江漢三章〕 于疆于理 至于南海

〔玄鳥〕 邦畿千里 維民所止 肇域彼四海

猶楚辭から一例を引用する。長いから韻字だけを記す。

〔惜往日〕 佩[○] 好[○] 代[○] 意[○] 置[○] 載[○] 備[○] 異[○]
再[○] 識[○](佩備は古音此
部に屬する)

右の通り上古の詩賦に於ては、之韻の文字(○)を附したもの、哈韻の文字(◎)を附したものが錯雜して押韻されて居る。

(三) 發音の説明

右に述べた所により、之哈二韻の文字が上古に於

て同一音を有した事が明になつたと思ふ。此處には更に進んで、日本古書の「オ」の音が合理的の音であることを説明する。今此二韻の文字に就き諧聲上から考察するに、徳韻（オク）職韻（ヨク）の文字と共通の音符を有するものが多いことを發見する。左に此等の文字の表を作つて見る（猶徳韻職韻に相應する三聲韻登韻（オウ）蒸韻（ヨウ）等と、共通の音符を有するものもあるから、參考に附加へて置く）。

寺聲	食聲	則聲	異聲	直聲	亟聲	意聲
寺時(待)	食	廁	異	置值	亟	意
特(等)	食飾	則測	翼	德直植	極極	憶

之哈の例(括弧内は哈韻)
 總職の例(括弧内は三聲韻)

徵 聲	乃 聲	能 聲	戠 聲	寔 聲	亥 聲	來 聲	弋 聲	疑 聲
徵	(乃)	(能)	熾 職	(寔賽)	(亥効)	(來萊)	試(代貸)	疑(凝)
(徵徵)	(仍)	(能)	職	塞	刻	勑	弋式式	嶸(凝)

右の表は、無尾の之韻哈韻と、有尾（支那原音ではK尾入聲）の德韻職韻との閒には、其昔聲音上の共通點があつたことを示すものである。次に先秦代の詩韻を検する時は、此二群の韻の共通點は其母音の同一なることであり、相違は前者無尾後者有尾なる點に存することが分る。卽詩經の押韻中には、無尾の之哈の文字と、K尾の入聲の文字とが通押されて居る例が、少からず發見されるのである。下に其

實例を引用し、各句の終の文字を盡く列擧し、疑問の起らないやうな規則正しい押韻を取り出し、之に依つて説明する。先づ

(1) 「出車一章八句」 車 牧矣 所 來矣 夫 載矣 難 棘矣

(2) 「大東三章八句」 泉 薪 歎 人 薪 載也 人 息也

(3) 「縣五章六句」 空 徒 家 直 載 翼 輔 輻 僕 載 險 意

(4) 「正月十章六句」 輔 輻 僕 載 險 意

の四例に於て、載の字が韻に入ることとは疑ないと思ふ、即無尾の載の字が、入聲五尾の牧棘息直翼輻と押韻されて居る、(牧輻福は廣韻の屋韻に屬するけれども、古音は此部にある)、次に

(5) 「大田四章九句」 止 子 畝 喜 祀 黑 稷 祀 福

(6) 「楚茨一章十二句」 茨 棘 爲 稷 與 翼 盈 億 食 祀 侑 福

(7) 「旱麓四章四句」 載 備 祀 福(備は古音此部)

の三例の祀の字に就ても同様の事が言はれる。それから(1)の來、(4)の意、(7)の備も韻に入ることとは明であらう。此の如く之の殆韻に屬する無尾の載祀來備意等が、「オク」「ヨク」の有尾韻と通押されるのは何故であらうか。是は微弱な(支那原音に於ては)入聲尾が脱落し、無尾音として發音された結果に外ならぬのである。即「オク」「ヨク」の「ク」尾を取り去れば其が直に之の殆韻の音であるのである、日本古書の「オ」音は實に其である。

此「オ」音の支那原音はもである、今登(德)韻の文字につき北京音を調べて見るに、例へば

能 nēng 朋棚 péng

登燈等 tēng 增層 zēng

得德特 tà 則 zé

色 zé

の如きものである。もは平たく言へば、「ア」と「オ」

の開の音であるが、日本人は皆「オ」に發音する。上記の音は「ノン」「ボン」「トン」「ツオン」「トー」「ツォー」「ソー」と發音される。即支那の \dot{e} と日本の「オ」は相對する音である。此事は遡つて古音にも適用出来る。登(德)韻の日本漢吳音の「オウ」「オク」は中古支那音の *o* *əu* *əi* を傳へたものであり、前記詩韻の例は上古の \dot{e} と入聲尾の脱落した $\dot{e}k$ との押韻であること明であらう。

(四) 漢代に於ける上古音の殘存

さて之哈韻の上古音は何時迄殘存して居つたかと言ふに、是は明に前漢代迄殘存して居る。漢代殊に前漢代は實に上古音が中古音に變ずる過渡の時代である。此事は漢代の詩賦の押韻を検して知ることが出来る。即此時代には先秦時代と同一の押韻が、種々の方面に於て殘存して居る。其中之哈同用の二實例を下に掲げる。一は前漢初期の武帝時代の栢梁臺詩であり、一は前漢末の揚雄の太玄の一節である。

栢梁臺詩

日月星辰和四時。	郡國士馬羽林材。	和撫四夷不易哉。	撞鐘伐鼓聲中詩。	周衛交戰禁不時。	平理清讞決嫌疑。	郡國吏功差次之。	陳粟萬石揚以箕。	三輔盜賊天下危。	外家公主不可治。	蠻夷朝賀常舍其。	枇杷橘栗桃李梅。	留妃女唇甘如飴。
驂駕駟馬徒梁來。	總領天下誠難治。	刀筆之吏臣執之。	宗室廣大日益滋。	總領從宗栢梁臺。	修飾輿馬待駕來。	乘輿御物主治之。	微道宮下隨討治。	盜阻南山爲民災。	椒房率更領其材。	柱杵構榑相枝持。	走狗逐兔張罟思。	追寤詰屈幾窮哉。

危の一字は破格の韻であるけれども、他は皆上古の押韻と同じく之韻哈韻同用である。

彊(太玄)

初一、測曰、疆中否貞不可與謀也

次二、測曰、鳳鳥干飛君子得時也

次三、測曰、柱中不能正基也

次四、測曰、爰聰爰明庶土方來也

次五、測曰、小人彊梁得位益尤也

次六、測曰、克我彊梁大美無基也

中古の尤韻に屬する謀尤の二字までか押韻に用いてあるのは、如何にも古音の面影を存するものと言ふべきである（尤謀等の尤韻の文字の一部は、上古に於ては其發音之哈韻と同一であつた）。

右は之韻哈韻の場合に就き述べたものであるが、支韻の場合も同様な説明が出来るのである。先づ日本古書の例を引けば、出雲風土記の奴奈宜。波比賣（沼河比賣）は、支韻の「ギ」を「ガ」に用いた例であり、欽明紀の彌移居（官家）は、同じ支韻の「イ」を「ヤ」に用いた例である。此等の文字の上古音が「ア」韻の文字であつたことは、先秦の詩賦に依つて證明される。

朝鮮字音と日本吳音との類似點に就て

即此等の文字は例へば多河儀等の「ア」韻の文字と押韻されて居るのである。次に此上古音が前漢時代まで殘存したことは、是亦詩賦の押韻に依つて證明される。詳細の事は省略する。

（五）日本に傳來せる經路

前漢の武帝の頃にはまだ／＼上古音の殘存したことは前述の通りである。漢武の朝鮮郡縣設置と共に、漢字が樂浪等の半島北部に傳來したことが明白である以上、殘存の上古音も同時に傳來した事は、蓋し疑ないことであらう。其が次第に半島南部の百濟新羅等に波及したことは、第二章の終に述べた所である、既に百濟に傳來した以上、百濟からの學問輸入の結果、阿直岐王仁乃至は段揚爾高安茂などに依つて、日本に傳へられた事は當然の經過と言つて良からう。

音韻考證附説には、神代に於ける新羅王子天日槍の渡來、崇神天皇時代の任那との交通、又漢代

に於ける倭人の支那交通に本いて、漢字は早く既に阿直岐王仁以前に傳來したのであらうと言つてある(古音傳來辨)。三國史記の新羅本紀などを見ても、始祖の時代から既に倭人の記事が散見する位であるから、かゝる事は無いとは言へないが、文献の上からは證明が出來ず、有つたにしても言はゞ有史以前の事である。尤支那に交通した倭人に依て、若干の漢字の輸入された事は、後漢光武帝の委奴國王印授與の一事を見ても明白であるが、此支那交通は西日本の邊民の仕業で、大和朝廷の與り知らぬことであり、猶此漢字が更に大和方面に傳來したか否かは、是亦到底史籍の上から證明出來ぬ。そこで單に最初の漢字傳來の時代を論ずるならいざ知らず、後世に繼續保存され一般に普及した文學の起源としては、やはり百濟傳來以前即有史以前に溯らない方が、穩當であり又確實であると思ふ。

(終)

三國史記の日蝕記事について

飯島忠夫

歴史的事實として記載されてあるものの年月が果して正確であるか否か、若しくは其の事實の發生したのは大體如何なる年月であつたかを檢定する爲の方法として、之に伴つて記されて居る所の日蝕記事を調査することは甚だ肝要である。希臘のタールスがメデア、リデア兩國の會戰の最中に起つた日蝕を豫言したことが、ヘロドタスの歴史の中に記してあるが、後世の天文學者は此の事實に本づいて、それに計算の結果を綜合し、此の日蝕を B. C. 685 若しくは B. C. 601 のものと推定して居る。又、近年民國の梁啓超氏は其の著の「中國歷史研究法」の中に、詩經と春秋とにある日蝕の年月日が天文學上の計算に符合することを唯一の根據として、之に伴ふ總て